

国の文化審議会は、九州地方に伝わる伝統的玩具「きじ馬・きじ車」の製作技術について、国が記録を残すべきだと認める「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国選択無形民俗文化財）」に登録するよう、1月24日に文化庁長官に答申しました。

九州の代表的な「きじ馬・きじ車」は、福岡県みやま市の「きじ車」や大分県玖珠町の北山田地区の「きじ車」、人吉球磨地域の「きじ馬」などがあります。

きじ馬を製作する担い手の高齢化やなりわいの変化で、消滅の恐れが高いことなどから今回選ばれ、答申後は国から正式に選択されます。県内の国選択無形民俗文化財の選定は、令和元年の「高森のわか」以来で、13件目となります。

答申……文化審議会が国に対して文化財の指定や追加指定を行うよう意見を述べる。



人吉球磨地域の「きじ馬」



福岡県みやま市の「きじ車」



大分県玖珠町北山田地区の「きじ車」

きじ馬に関する言い伝え

- 平家の落人が人吉の奥地で都をしのんで作り始めた
- 山から山へ移動していた木地師(木工職人)が里に下りて売っていたのが「きじ馬」として広まった
- 球磨川下りが盛んだったころに船大工が作って広まった
- 子どもたちがまたがって馬乗りし、遊んだことからきじ馬という名前になった

- 元々は、着色しない素地のままだった
- 人吉藩時代に大火事が起きた後、金鶏(ミヤンマーの火除けのお守り)の色に似せた
- 青井阿蘇神社に奉納するために縁起のいい色を使用した

※全て言い伝えによるものです。

人吉球磨地域の「きじ馬」とは？

人吉球磨の「きじ馬」はキリ・ダラ・フジ・カシワなどの雑木を材料として作られる熊本県を代表する郷土玩具。野鳥のキジをかたどった車型の玩具で、子どもが紐を付けて引いたり、上に乗ったりして遊ぶ。かつては旧暦の2月に春の市が開かれ、露店で売られている「きじ馬」を男の子に、「花手箱」を女の子に買って帰ることがこの地域の習わしだった。ほかの地域のきじ車と比べると、くらがらないことなどが特徴。



父が残した財産を残していく

初代の住岡喜太郎さんの創業から今年で百年目。今は2代目の忠嘉さんと3代目の孝行さんが受け継いでいます。初代の直線的な形のきじ馬に比べて、2代目の忠嘉さんのきじ馬は木の曲がりを利用した形が特徴。昔ながらの顔料を使用した絵付けは、同製作所のみで受け継がれています。今回の選定を受け、忠嘉さんは「技術は父から引き継いだ財産。父に変わってお礼を言いたい」と喜びの声。孝行さんは「使用する木材が非常に手に入りにくくなっているので、今後きじ馬は貴重なものになっていくかもしれません」と話していました。

住岡郷土玩具製作所 住岡 忠嘉さん

長年の勤で迷いなくヨキ（小型の斧）を入れる忠嘉さん（上）
手作業には欠かせない、特注の仕事道具（右下）
一家で伝統のきじ馬作りを守る住岡さん家族（左下）



文化財選定を受けて

熊本県では現在、球磨郡錦町の住岡郷土玩具製作所と人吉市中林町の宮原工芸の2カ所だけがきじ馬を製作・販売しています。地域の宝に選定されたきじ馬作りに対する思いを聞きました。



興味を持ってくれる人に技術を受け継ぎたい

木工関係に携わっていた宮原健雄さんが創業。2代目の清光さんは現在療養中のため、妻のていさんが形作りから色付けまでの作業を全て一人で担い、きじ馬を守っています。今回の選定を受け、ていさんは「文化財に選択されることは非常にうれしく、きじ馬に携われたのは誇らしいこと。人生の一つでもあり私が生きた証です」。これからについて「今はきじ馬を作り続けることで一杯。技術の伝承は敷居が高いと思われがちですが、誰もが興味を持ってくれるとうれしい。どうかこの技術を残していきたいです」と話していました。

宮原工芸 宮原 ていさん

慣れた手つきで筆を滑らせきじ馬に命を吹き込む（上）
現在のはていさんが1人できじ馬の製作を担う（右下）
刃物を固定し、きじ馬を削りやすとした独自の道具（左下）